

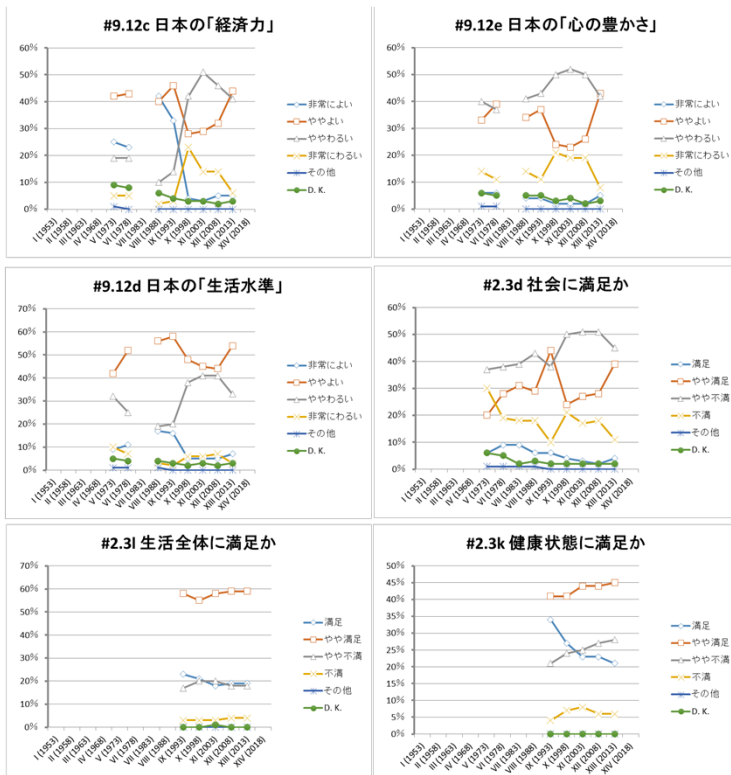
“バブル崩壊”後の日本人の自信喪失について

～「日本人の国民性調査」から～

前田 忠彦 データ科学研究系 准教授

1. はじめに

- 日本人の国民性調査: 統数研が1953年以来5年に1度実施してきた継続調査
- 1993年から1998年にかけて、日本社会に対する評価に関する項目が大きく変化(“自信喪失”方向)
- 個人生活関連の「満足感」の一部項目も水準が下がった? 連動した? なぜ?



2. データと分析方法

【データ】

- 日本人の国民性調査: 第9次(1993年)～第13次(2013年)までの5回のデータ, M型調査票
- サンプルサイズ 1,091 ~ 1,790

【分析の視点】: ドメイン満足→生活満足

水準(平均値)が変わっただけなのか, 相互関係や説明要因が変わったのか?

方法: 重回帰分析

被説明変数: 生活満足

説明変数: 属性変数: 性・年齢(10歳刻み)

とその交互作用, 学歴(短大卒以上・それ以外)

意識変数: 4つ領域別満足度(社会、余暇、健康、家族: 4段階評定)、帰属階層(5段階)

3. 結果

表1. 重回帰分析の結果の要約

説明変数	13次 (2013) (n=1505)	12次 (2008) (n=1504)	11次 (2003) (n=1091)	10次 (1998) (n=1266)	9次 (1993) (n=1791)
社会に満足	5	5	5	5	4
家庭に満足	2	3	1	2	1
余暇に満足	3	2	3	3	3
健康に満足	1	1	2	1	2
帰属階層	4	4	4	4	5
性別	.000	.000	.003	.009	.001
年齢	.000	.104	.000	.001	.000
学歴	.714	.470	.082	.092	.273
修正R ²	0.489	0.424	0.484	0.419	0.397

注) 意識変数(上5つ)については、年度内での効果量の順位下3つについてはp値を示した。

- 修正R²は0.397～0.489。第9次が一番低いようではあるが、系統的に高まっていたわけではない。
- 性別は常に有意(女性が満足度高い)
- 年齢の効果は必ずしもはっきりしない
- 学歴の効果ははっきりしない
- 領域別満足(等)の意識変数の説明力は、家庭満足・健康満足が高順位、社会満足・帰属階層が低順位である傾向

4. まとめ

- 社会の評価と個人生活関連の満足感が連動したか? ひとこと言えば曖昧
- 第14次(2018年)分を含めた再分析を